Chapter 28: **レックウザの三度目の人生 Pt.2**

カントー出身のイーブイ三きょうだい――ブースター、シャワーズ、サンダース――は、いつもの放課後の散歩中、広場の片隅に設置されたレックウザ風のギャンブルロボを通りかかった。派手に光りながら、騒がしく回転している。

「おお、なんかカッコいいじゃん」  
サンダースが目を輝かせた。

だが彼が一歩踏み出す前に、ブースターとシャワーズが素早く前に出て、毛並みでできたトラウマの壁を形成した。

「ダメだ」  
ブースターがきっぱりと言う。空からガチャ玉が雨のように降ってきた記憶が、今も焼き付いている。

「ぜったい無理」  
シャワーズがサンダースの肩に前脚を置いて加えた。  
「あの嵐で溺れかけたんだから。もう二度とごめんよ。」

サンダースはきょとんとしながらも、二匹を信じてうなずいた。  
「はいはい、わかったよ…」

その様子を、街灯の陰からバリヤードが見つめていた。長いため息をつきながら、ちっこすぎる白衣のポケットからペンとメモ帳を取り出して呟く。  
「なんでこいつら騙されないんだよ…」  
“もっと光らせる”や“初回無料スピン”など、アイディアを書き殴る。無理な笑顔がピクピク震えていた。

ブースターが後ろを振り返り、目を細めた。  
「見てるな、あのピエロ。」

シャワーズがうなずく。  
「ずっと見てていいよ。私たちはもう、あのリサイクルされた悪夢には騙されない。」

三匹は歩き去り、バリヤードは路地裏の屋台にしょんぼりと戻った。近くではピカチュウが無言でモップを動かしながら呟いた。  
「だから言ったのに、クソだって…」

—

その夜――  
またもレックウザ風ギャンブルボットが派手に光り出す。今度は、数匹のドラメシヤと、その兄姉であるドロンチたちが通りかかり、きらきら光るマシンに興味津々で笑っていた。

「ジャックポット！君の勝ち…でも次はどうかなぁ！」  
という陽気な声と回転するホイールに惹かれて、ドラメシヤたちは一匹ずつ台に浮かび上がり、デジタルコインを投入。ガチャ玉が飛び出し、中にはしょーもない小物か、“次の財布に期待！”と書かれた空っぽのラベルばかり。

最初は止めようとしていたドロンチたちも、すぐに好奇心に負けて夢中に。全員で外れを引いてもなぜか盛り上がっていた。

そのとき、巨大な影がマシンを覆った。

配達の帰り道、手には食料品の袋を抱えたドラパルト――疲れ切ったシングルファーザーだった。目の前のキラキラとしたゴミの山、無邪気に喜ぶ子どもたち、そしてあの「レイボット」がデジタルな笑顔で待ち構えているのを見て――

ドラパルトの目がピクついた。

次の瞬間――  
「ドガアアァン！！」  
ドラパルトの角から放たれたシャドーミサイルがマシンを吹き飛ばした。燃え上がるコード、煙を上げるスクラップ。

「オレがなんて言った！？ギャンブルはダメだっつったろ！！！」  
怒声が路地に響いた。

バリヤードが角から覗いた瞬間、真っ青になった。ドラパルトが爪を鳴らすのを見て。

「返金なし…？ じゃあその分ぶっ壊す！！」

ピカチュウはモップを持ったまま、静かに闇の中へフェードアウト。  
「うん、もう無理。やめよ。」

—

砕けた機械の残骸、焦げたコードの中から、奇妙な光がチラつく。レイボットの中枢が微かに作動し、レックウザの歪んだ姿が再び現れる。

もはや神々しさはなく、鱗はひび割れ、身体はかがみ、手にはスカムされたコインとゴミだけを握って震えている。

「…も、もう一回だけスピン…当たるかも…超レア…」  
息も絶え絶えに言う。

ドラパルトは冷たい目で見下ろした。

「まだオレを騙す気か？てめぇ、自分が何言ってるか分かってんのか？」

後ろでドラメシヤたちが震えていた。

レックウザはさらに震え、まるで子ども相手にマルチ商法を売り込もうとする詐欺師のように、コインを必死に抱きしめていた。

ドラパルトはその手からコインを全て取り上げた。  
「これはウチの子たちのもんだ。」

バリヤードが路地裏の屋台の残骸から覗いた。目を見開き、驚愕する。  
「…えっ、あいつ本当に生きてたの！？ただの壊れたAIコードじゃなくて！？」

レックウザは地面に崩れ落ち、土や石にまで詐欺トークを囁いている。  
「無料…スピン…今だけ…チャンス…」

ドラパルトは顔を近づけた。  
「とどめすら刺さねぇよ。飢えてろ。」

彼は背を向けた。レックウザは路地のすみにうずくまり、自分の詐欺ポスターにヨダレを垂らしながら、誰にも聞かれないセールストークを続けていた。そうして、あらゆるマルチ商法の末路のように、静かに、惨めに、誰にも惜しまれずに消えていった。

—

その後――

バリヤードはまるで日常の作業のような落ち着きで、レックウザの痙攣する体を車輪台に乗せて病院へ運んだ。口ずさむ陽気なメロディとは裏腹に、「患者」の様子は絶望的だった。

「まぁまぁ！可哀想に…！」  
いつも明るく母性的な看護師ハピナスは思わず叫んだ。

「栄養失調、妄想癖、そして友達ゼロの気配！すぐに治療しましょうね、坊や！」

彼女は癒しの鈴、タマゴうみ、アロマセラピー、さらにサービスでマックスアップ回復スムージーまで施した。

レックウザの目が光を取り戻し――感謝の言葉を言うかと思いきや、口を開いた。  
「オメデトウ！あなただけの…超限定ガチャが今…！」

パチッ。

バリヤードが無言で小型リモコンを弾いた。  
レックウザの目が虚ろになり、詐欺台詞が途中で止まる。ピッという機械音とともに、レックウザはピクリとも動かなくなった。

「いい子だ…」  
マイムが囁く。

レックウザは機械仕掛けのようにお辞儀をし、ペットのようにマイムの横に立った。

「えっ…すごく早かったわね？」  
ハピナスは戸惑いながら笑った。  
「おだいじにね～？」

バリヤードは一言も返さず、コインの詰まったサッチェルをカウンターに投げた。  
「治療代だ。釣りは取っとけ。」

そう言って、レックウザを従えて病院を後にした。

—

その夜、ブラッキー院長は防犯映像をじっと見つめていた。記録用のメモ帳にペンを走らせる。

｜対象：ミスター・マイム：冷静だが操作的  
｜レックウザ：不安定、再犯の恐れあり  
｜ハピナス：善意過剰、緊急治療プロトコル要見直し  
｜対応：息子に警告。心理操作防止策を強化すること。